

【タイトル】 「絆が見つけないだ夢——聞こえない私の未来への挑戦」

【概要】

本企画では、生まれつき両耳が聞こえない著者が、一般校で育ちながら、自らの可能性を信じ、圧倒的な行動力と周囲との絆の力で数々の壁を乗り越えてきた軌跡を描く。「前例がない」と直面する壁に幾度も挑みながらも、逆境を楽しむ視点、等身大の自分を受け入れる心、留学先のドイツとその後移住したフランスの異文化社会で培った多様なコミュニケーション術、フランス人との国際結婚と出産を経て、多文化・多言語の子育てに挑みつづける数々のエピソードは、主体性を大切にしつつ、絆を大切にすれば、未来を切り開く可能性があるということを示す。本書は既存の枠を超えて、自分らしい未来を築こうとするすべての人々に力強いインスピレーションを与える。

【想定する読者ターゲット】

海外留学に興味のある人

自分の枠に囚われて動けなくなっている人

一歩踏み出す勇気を持ちたい人

【構成案】

第1章 家族と友人の絆 挑戦と冒険の日々が始まる

ポジティブな両親と音楽に囲まれ「逆境を楽しむ力」が育った

普通校は最高のコミュニケーション実践練習場だった

海外の国際コンクールを回って身につけた挑戦マインド

家族から学んだ「やればできる」の黄金ルール

前例なし？門前払い？それでも挑戦した欧州大学留学

ドイツとフランスで出会った多種多様なバックグラウンドの人たち

子育てと仕事と役員の三刀流

子育てと仕事のネットワークは宝物

第2章 コミュニケーションがもたらす絆【みんなと話したい！私流コミュニケーション術】

相手に興味を持って笑顔で伝える

問題提起の仕方から対話の大切さまで

誠実さが生む奇跡：小さな約束が大きな絆に

手話と文字で乾杯！みんなで楽しむアペリティフ（食前酒）

第3章 外国語でつながる絆 【言葉の壁なんて怖くない！楽しく学んだ語学のヒミツ】

外国語学習の極意「カタカナで上等！何もやらないよりはマシ！

白か黒かじゃなく、グラデーションで可能性を広げてみよう

うまくいかなくても大丈夫！いつだって代案が味方になる

第4章 フランスの中で見つけた絆 【フランスにおける多様性の取り組み】

トゥールーズ市のろう者ウェルカムな仕組み

手話通訳者&文化仲介者を育てる教育現場に潜入！

フランス手話がもたらす新たな発見

サンプル原稿

「経験してみないとわからない」をモットーとする著者は、生まれつき両耳が聞こえないという逆境を抱えながらも音楽あふれる家庭で育ち、プロのピアニストになった姉の影響から異文化への興味を深めていきます。口話と読唇術を駆使し一般の保育園から高校まで育ち、大学入学後は手話も取得、新たなコミュニケーションの扉を開きます。

30歳直前に単身でドイツ留学を果たし、すべての語学学校から門前払いをされるも、ハンブルク大学を卒業します。その後、国際結婚した夫の仕事の関係でフランスに移住、現在は仏の組織でのコーディネーターや日本語補習校の校長として活躍しながら、バイリンガル子育てでも奮闘している軌跡を描きます。

保育園から大学まで通っていた普通校ではさまざまなエピソードがありますが、中学時代の忘れられない思い出の一つとして校内講演会でゲストスピーカーが招かれ、お話を聞く機会があったけれども、講演会のようなイベントは体育館のような広い会場に全生徒が集合し、講師はステージの上で話されるので座席からは講師の姿は豆粒ほどのように小さくなり、その間著者には全くわからない。そんな著者の気持ちを慮った友人が、1時間半の間隣に座り、口をはっきり開けて口述通訳をしてくれたエピソードなどが盛り込まれています。

また20代最後で、聞こえない人として前例のなかったドイツ留学に挑戦。最初は行く先々での語学学校で聞こえないことを理由に門前払いをされ落胆しますが、たまたま泊まり込みの手話の講習会を見つけ、そこで出会ったドイツ各地から来ていたLGBTQの受講生たちが気持ちの温かい人ばかりで、自然で飾らない彼らが、ありのままに著者を受け入れてくれ、彼らと一週間3食や休憩など行動を共にし、交流していく中で、落ち込んだ気持ちが癒されていき、ドイツ留学を諦めずに踏みとどまろうという気持ちにさせられたエピソードなども記されています。

第2章では、コミュニケーションを通じて生まれる「絆」の大切さについて語られています。相手に興味を持ち、笑顔で接することで、言葉だけでなく心のつながりを築くことができます。また、問題提起の仕方や対話の重要性にも触れ、誠実な態度が信頼を生み、小さな約束がやがて深い絆へと発展していく様子を紹介しています。

第3章では、外国語学習を通じて生まれる「絆」に焦点を当てています。「カタカナで上等!」という考え方をはじめ、完璧を求めずに実践することの大切さを強調し、言葉の壁を恐れずに挑戦する姿勢が新たなつながりを生むことを示しています。語学は白黒ではなくグラデーションのように広がるものであり、たとえ完璧でなくても相手との理解を深める手段となります。第4章では、フランスにおける多様性の取り組みを紹介し、特にトゥールーズ市のろう者支援に注目します。手話通訳者や文化仲介者の育成、フランス手話の普及などを通じて、言語を超えた絆が生まれる様子を描きます。異なる言語や文化を持つ人々が互いに支え合い、共に生きる社会の姿が浮かび上がる内容となっています。

以上です、よろしく願いいたします。